

市政ニュース

韓国慶州市東川初等学校国際交流体験学習使節団が来市

異文化に触れる出会いを大切に

1月28～30日までの3日間、韓国慶州の東川初等学校国際交流体験学習使節団34人（児童30人、引率4人）が出石を訪問しました。

同市と出石地域は、平成3年に国際友好親善都市宣言を調印してから相互に国際交流を深めており、同市からの児童の訪問は11回目となります。29日、寺坂小学校で開催された歓迎式で、児童会長の久木田知矢くん（6年）が「僕たちが楽しみにしていた日が来ました。文化は違いますが互



▲たて笛で曲を披露する東川初等学校の児童たち



▲けん玉に挑戦する児童たち

いに理解して交流を深めたいです」と歓迎の言葉を述べる。と、使節団を代表して朴駿賢くん（6年）が「故郷を離れて日本に来ることに不安はありましたが、無事に着いて皆さんの顔を見ると安心しました。この出会いを大切にしたいです」と答えていました。

歓迎式の後、寺坂幼稚園・小学校の園児・児童らと東川初等学校の児童らは、ゲームや合唱、昼食などで交流を深めました。

この日、使節団一行は、出石地域内の小学校児童14家庭にホームステイし、30日に大阪を見学した後、31日に帰路に着きました。

清滝地区公民館に県民交流広場を開設

公民館活動や子育て支援に有効活用

1月21日、清滝地区公民館内に県民交流広場が完成し、区長・行政関係者・地元関係者などが集り、同公民館で開設披露式を行いました。

これは、県の県民交流広場事業の補助を受け、調理室の増築と既存の調理室を交流広場「きよたき」として改修したもので、今後、子どもをはじめ多くの人が集い、放課後子ども教室や公民館事業などの取組みが活発に行われることが期待されます。

当日は、オープンを祝って、清滝地区公民館 大正琴教室



▲大正琴教室の皆さんの演奏に聞き入る関係者ら

の皆さんが千の風になってなどの曲を披露し、集まった関係者は優しい音色に聞き入っていました。

グレーゾーン金利過払い金の差押を執行
自主財源確保に市を挙げて取り組む

市では、市税納付の公平性の確保と、滞納処分の執行により滞納税額の減少を目指すとともに、市民の安心・安全な生活に資するため、1月23日、グレーゾーン金利の過払い金の差押を執行しました。これは、市税などの滞納者が法定利息を超えて消費者金融に支払ったいわゆる「グレーゾーン金利」の過払い金と損

害金の不当利息返還請求権、およびこれに対する債権差押通知書到達日までの年5分の割合による利息の支払請求権を差し押さえるものです。この取組みは市では初めてで、兵庫県内の市町では3番目となります。

差押金額から滞納額を差し引いた残額は滞納者へ返還することになります。

主な市政の動き

【1月】

22日・中国教育関係者視察団来市（23日）

23日・北但広域療育センター建築工事安全祈願祭

・豊岡市防災会議・豊岡市国民保護協議会

・グレーゾーン金利の過払い金差押を執行

21日・清滝地区公民館県民交流広場開設披露式

24日・国際スキー連盟スキー大会開会式・奥神鍋スキー場

・西宮市へ神鍋高原の雪をプレゼント

28日・韓国慶州市東川初等学校の国際交流体験学習使節団来市（30日）

30日・豊岡市総合健康ゾーン整備運営事業審査委員会答申

【2月】

1日・有料広告事業募集開始

2日・こころをつなぐ市民集会

・「元気ひだか」神鍋冬まつり

9日・豊岡市保育協会保育研修大会

10日・但馬の医療体制に係る説明会

12日・植村直己冒険賞発表

中筋小学校で「地球温暖化と太陽光発電についての出前授業を実施」

環境学習で電気を作る仕組みを体験

2月5日、中筋小学校で、㈱力ネカのソーラーエネルギー事業部(大阪市)に勤務する工学博士の新田佳照さんを講師に招き、地球温暖化と太陽光発電についての出前授業を実施しました。

当日は、5・6年生31人が、地球温暖化や太陽光発電の仕組みなどについて説明を受け、身近な生活用品で電気を作る実験をしました。

これは社会貢献活動の一環として、太陽電池を作る㈱力ネカソーラーテック神美台)から、市教育委員会への働きかけにより、環境学習のために市内の学校で初めて行ったものです。

実験では、風車の羽をうちわであおいで回し、発光ダイオード(LED)を点灯させる風力発電などを体験しました。参加した児童は、「風力発電で電気をおこすことは大変」と話し、エネルギーの大切さを実感しました。



▲うちわで風を送り、風力発電の実験をする児童たち

中国教育関係者視察団来市

豊岡でコウノトリを通じ環境保全活動を学ぶ

1月22日・23日の2日間、近畿運輸局がすすめている修学旅行の誘致などを図る「ピジット・ジャパン・キャンペーン」地方連携事業の一環として、中国の教育関係者や現地報道関係者ら19人が豊岡を訪れました。

視察団は、北京市、山東省などの中学校や外国語学校などの校長、副校長、新聞やテレビ局の記者などで、22日は、但東町奥藤の農家民宿「善」で、

古風な造りの建物を見ながら農村の雰囲気を楽しみました。夜は、城崎温泉に宿泊し、

外湯めぐりを初体験しました。

また、23日は県立コウノトリの郷公園で、中貝市長からコウノトリの野生復帰事業を通じて市が取り組む環境保全と経済発展の両立について説明を受けました。

説明を受けた一行は、「中国も環境教育に力を入れているので、豊岡に見習う点は多い」

今度は学生を連れて来たい」と話していました。



▲コウノトリを視察する中国教育関係者視察団一行(県立コウノトリの郷公園)

中貝市長の「後継母」記

同じであるということ

やや旧聞に属しますが、昨年1月、豊岡からバス2台で名古屋の御園座に行きました。川中美幸さん主演の大石理玖の芝居があったのです。内蔵助役には田村亮さんでした。

道中、車窓から外の景色を眺めながら、日本は何というつまらない国を作ってきたのだ」と愕然(がくぜん)としました。ここが大阪なのか名古屋なのか、区別のつかない街並みがのつぺりと続いていくからです。その地の固有の歴史や伝統を捨て、古いものを壊し、ひたすら同じようなコンクリートの景観を作ってきた。こんな国は、

世界の中で文化的に存在する価値があるのだろうか、という気ずきました。

他方、お芝居のほうは、堪能しました。長男の主税は内蔵助と一緒に討ち入りを果たすのですが、次男の吉千代は連座を免れるために仏門に入られ、母を恋ながら若くして死んでしまいます。会いた

さが募って「母上様、母上様」と何度も書き記す吉千代の気持ち、理玖のわが子と思う気持ち、離れ離れの親子に「ふびんじゃあ」と叫ぶ祖父の気持ち。芝居のこととはいえ、300年前も今もきつと同じなんだろうな、と思いながら、涙を流していました。

片や同じであることのつまらなさ。片や同じであることの感動。

その地に固有の自然、歴史、伝統、文化に根ざしてまちの個性を際立たせ、来訪者に違うこと」を楽しんでいた。だから、同じ人としての共感を持つていただけのようにもてなす。そんなまちをつくりたいと思います。

昨年12月、出石が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。出石の人たちが自分たちの歴史や伝統を大切にしてきた、そのこと自体が共感を呼ぶに違いない、豊岡のこの道は間違っていない。改めてそう思います。

